



消えた街角：富岡畦草・記録の目シリーズ 昭和36年、日本の鉄道発祥地変遷

“汽笛一声新橋を”の鉄道唱歌で知られる新橋駅はここにあった。明治五年（一八七二）わが国最初の鉄道は、ここから横浜駅（現在の桜木町駅）に向かって開通。明治二十二年、東海道本線が全通し、新橋駅は東京の玄関口となって発展した。しかし、大正三年に東京駅が完成して東海道本線が延長し、経路変更される。新橋駅は現在地に移り、もとの新橋駅は汐留駅と改称し、貨物専用の駅になった。以来、汐留駅は肥大化する東京の流通センターの役割を担ってきた。そして、敗戦後まもなく昭和二十四年に日本国有鉄道が発足、すぐに朝鮮動乱が勃発したため、汐留駅は連日連夜米軍の軍需物資輸送でこたえ返すことになる。

この朝鮮動乱の特需で活力を見出した日本の産業は、急速に復興し、国が工業立国を標榜すると郊外に競って工場や住宅が建設された。そのため人口の大移動も起こり、鉄道輸送は繁忙を極めた。新しい輸送手段として、汐留、梅田間にコンテナ専用特急が運転を始めたのは、昭和三十四年のことである。一方、旅客輸送でも画期的な東海道新幹線の建設が始まった。

こうして社会に貢献した鉄道貨物輸送ではあったが、経済成長を支えられて向上した国産自動車、特にトラックの増加と高速道路の建設で、次第にかげりが見えだした。そして昭和五十年代に入ると、せつかく新設された貨物駅も閉鎖に追い込まれた。加えて、国鉄の解体民営化で多くの施設が取り壊され、跡地は国鉄清算事業団の手に移って売却された。

ここに汐留跡は、東京でも特一等地で、色々議論を呼びながら民間に譲渡され、現在の状況に立ち至った。その中で、東京都の公共交通システム「ゆりかもめ」の起点駅が、ささやかながら鉄道史との縁を保っている。

文 富岡畦草とみおか けいそく
大正15年8月、三重県生まれ 日本写真協会、日本写真家協会、自然科学写真協会などの会員

(平成14年3月8日 富岡畦草撮影)



この写真は、現在進行中の「汐留再開発」を上の写真と同じ方向である地図矢印部分から撮影したものだ。工事中のビルは左から順に 電通恒産汐留アネックス棟、電通本社ビル、東京ツインパークス、松下電工本社ビル。写真中央右に写っているモノレール「ゆりかもめ」はこのエリアの中心を走ることになる。本誌「都市の記憶」でも紹介しているが、この松下電工本社ビルの右側では、明治5年に開業した当時の「旧新橋駅舎」の復元工事が進行している。来年春のオープン予定で、レストランと鉄道関連の資料室が併設されるといふ。(文：渡辺邦博)

